

随筆



困ったなあ…亀田の勝利。
批判もしたく、擁護もしたく…

社会福祉法人五和会 名護療育園 小児科
勝連 啓介

ボクシングの歴史と権威は誇り高く、幾多の真の名勝負が繰り返されてきただけに、もしスッキリ勝てなかったら亀田興毅選手に対する世の中の反発は大きいはず、そう覚悟していたとはいえあの結末。判定の直後、ケータイが鳴りました。親父でした。「どう見たって亀田の負けだよ。早々とテレビの前に座ったのに、散々ドキュメント見せられた拳句にあの判定はないよなあ。大体、亀田のエラソーな態度は善くないよ」ご立腹です。切ってすぐ今度はいつも評論家のような口調でお話しになる先輩の声「これは出来レースだ。審判が興行元から貰ってるだろ。KOされない限り結果は決まってるんだよな」キビシイことをおっしゃる。困ったなあ…説得力のある「僅差」ならば、判定が出た瞬間「えー!？」とは思わないはず。でもなあ…「えー!？」って気持ちになってたよな、俺。確かに「嘘!？」って思っちゃったよな、俺。うーん、世間一般的にもそう見えただろうな…いっそのこと今回は潔く負け、という結果なら良かった。するとアンチの方々にも「よく頑張ったじゃないか、やはりボクシングは甘くない」なんて見直されたかもしれないのに。弱っちゃったなあ。これがボクシングおたく、ボクサーの処遇を良きものにしたいと願っている私の心象風景でした。その翌日、職場では男性職員はもとより、普段スポーツの会話なぞしたこともないおばちゃん保育士さんでさえ「せんせー昨日のカメダ、アレなんねー」だって。視聴率50%、亀田人気の凄まじいこと。話題の一戦を振り返ってみましょう。

8月2日横浜アリーナ、WBA世界ライトフライ級王座決定戦、亀田興毅がファン・ランダエ

タを2-1の僅差判定で破り、弱冠19歳でチャンピオンになりました。が、「判りにくい採点結果」でした。良いこととは思いませんがスポーツの世界では、ホームタウンディジョンいわゆる地の利はいくらでもあります。世界タイトルマッチの会場は異様な雰囲気です。例えばサッカーのテストマッチや阪神戦の甲子園球場も同様ですが、圧倒的なホーム状態です。今回も観衆は超満員の1万5千人、総亀田応援体制の中での戦いであり、ジャッジはその状況下でラウンドマストシステム（毎ラウンドを独立した一試合と考え、例え微差であってもどちらが優勢かを振り分ける）で採点した訳です。決して公平な戦い、判断にはならないでしょう。しかし勝負事はそんなものです。より有利な状況で勝負したいと願うのは陣営にとって当たり前。当然スポンサーや中継局もその流れを作ろうとします。さらに、現代の日本スポーツメディアは、単純に試合を放送するだけでなく、深入りして演出にまで凝って、視聴者の感動を招こう、感情を操ろうとします。そこに大きな問題があると思うのです（K-1やバレーボール中継も然りです）。亀田選手は精一杯のファイトをし、世界レベルの実力を証明してみせましたよ。しかし物議を醸し出してしまいましたね、やはり。どんなに擁護しようとしても、試合（判定）に勝って勝負に負けたという印象がねえ、困ったなあ…

微妙な判定に泣く者、笑う者。これまでもタイトルマッチで多くの悲喜劇がありました。亀田批判派ファンが夢に描いていたシナリオは、「負けて」「反省して」「謙虚になって」「やり直す」ことだったでしょう。しかしですよ、年に何十試合も出場できるプロ野球・サッカー・ゴルフと違い、せいぜい4試合しか出来ないボクシングではひとつの負けが即引退へと繋がります。ひとつ負けるとそこで周囲に見放されてしまうことが実に多いのです。簡単に次は無いです。際どい判定を物にした亀田興毅には運があったということ。先に繋がったという事実だけが殊の外大きいのです。厳しい人生の中で、

ある瞬間わずかでも自分の方へ運が傾いたとします。それをその時本当に自分の物にできるかどうか、それは運をも味方に付けるだけの努力を普段からどれほどやってきたか、そこに懸かっているに違いないと思うのです。そこに勝負の神様は存在するのかもしれませんが。亀田の練習の量と質は群を抜いています。寝ても覚めてもボクシング、つまりは傾きかけた運をしっかりと物にするだけのことを奴はやってきたはずだと私は強調したいのです。努力することにかけての天才、その男がベルトを手にしたという事実。ただし、あらゆる運を味方にしてのことでした…。

このように考える私のようなファンは甘い…ですかね？試合後のリングで興毅は「親父、今までありがとう。おかあちゃん、俺のことを産んでくれてありがとう」と涙しました。ならばもう一声“今日の自分は弱かった。けど皆さんの応援のお陰で勝てました。ありがとうございました。次はもっと強くなります”そう言って欲しかったなあ…、今後のために。この試合内容で「どんなもんじゃい！」はマズいでしょ。

亀田親子には「巨人の星」などスポ根番組を彷彿させるような、一途に頑張る昔懐かしい本来の日本人を体現する姿がダブります。「興毅は自分でヘタな試合したと言っとる。それが分かっているからもっと強くなる」父、史郎氏の言葉に頷きたくもなりませんか？

実は、西部日本ボクシング協会広報を担当する立場にある私の、憂えることがもうひとつ。現在、県出身ボクサーには亀田以上の逸材が数多くいます。嘉陽宗嗣（白井具志堅ジム）、竜宮城（沖縄ワールドリング）、名城信男（大阪六島ジム）ほか。願わくは、亀田人気に便乗して業界あげてローカル選手にもスポットライトを、なんて期待していたのですが。世間的には、もうボクシングは見たくもない、そんな方向に行ってしまうようで…やはり困ったなあ…亀田の勝利。その代償は郷土のボクサーが被るのだよ、と半ば被害妄想的な感情を未だ消化できずにいる中、10月に嘉陽が世界初挑戦するというニュースが舞い込んできました。いったいどれほどの県民が関心を抱き、応援してくれるのでしょうか？

原稿募集！

随筆のコーナー（2,500字以内）

随時、募集いたします。日常診療のエピソード、青春の思い出、一枚の写真、趣味などのほか、紀行文、特技、書評など、お気軽に御寄稿下さい。